すみれ亭句会（ウエップ句会）　会報　65　（平成二十三年三月三十一日）

百花逍遥（当季雑詠）

天

水温むてにをは軽く立話　藤　則

寒がゆるみはじめると、心なしか水面の動きにさえ、春の生命がみなぎり水温もいくぶん上がったような気がする。

古詩に「春水四沢に満つ」といい人の口も軽くなるのだがそのリラックスの度合い、要諦を会話の「てにをは」にありと喝破した氏の慧眼にいたみ入るのである。日本語は口語になるほどてにをはをうやむやにして日常性を強調することが可能な言語。「てにをは軽く」の措辞がじつにいい。

四肢の力を抜いてふわと立ったバッターボックス、いきなり場外へ打ち込む先制ホームラン。

見上げると澄みたる空に沈丁花　冬　草

眼目は「見上げる」である。古来、わが国の文学では、景色、山野を見渡したり見上げたりするのは、対象に敬意を払うことと同義であった。

見渡せば花ももみじもなかりけり
浦のとま屋の秋の夕暮（藤原定家）

春の桜、秋の紅葉は通俗なものでそれ以外のものに美を見出す。早春の頃、その香りにふと足を止め、そして匂いの源の空を見上げる。澄んだ春の空も沈丁花の一部で見事である。

春寒や流動食の汁旨し　弓　人

「漸覚東風料峭寒」とあるように、早春の風は肌に鋭く冷たい感じである。がすでに春の気分は濃厚でどこかそくそくとする歓びがこみ上げるてくる。

氏はそれもそのはず、手術も無事終了して今や桎梏の点滴も身を離れ、食事も流動食へと変わった。それもいささか食事の体裁を整えた汁もので、あとは指折り数えて退院日を。

退院の暁にはまずお神酒で身体を清めさてそのあとは「青天」をしこたまいただいて・・・・・。

春寒という季語の本意と生命感の躍動が素晴らしく春らしい秀句とした。

地

翡翠の春の夢なるホバリング　雅　子

翡翠（かわせみ）は羽の色はコバルトブルー、翼は緑青色、そして腹部はオレンジと美しい小鳥で、近頃は多摩川あたりでも見かけることもある。ヘリのように中空に静止して水中の獲物を狙う。春の夢を見たのはカワセミか作者か。いずれにしろ作者にとっても幸せな瞬間であったろう。

待ちあぐむ蓋のゆるびや焼栄螺　ま　さ

子供の頃は生きた栄螺（さざえ）に醤油たらし直火で焼いた。いわゆる磯焼である。今では江ノ島あたりでは、細かく刻んだ具にだし汁を加えてぐつぐつ煮てるようだ。時宜を得ると蓋が持ち上がる。かたずを呑んで見守る子供たち（作者も？）。香ばしい匂いがただよう。

雪解の山姿現す像の鼻　河　童

雪解でも積雪が部分的に溶けて斑雪となり、雪間から岩肌が覗くことを言っている。その景が象の鼻のような不思議な形。子供の絵本のようだと喜んでいるのだ。この純粋無垢な発見を買いたい。信州あたりのスケッチか、それとも氏の故郷の思い出か。

鳩よけのニッカボッカのお通りだ　満紀子

ユニークな一句とである。まず口語の「だ止め」が駄々っ子のようで意表を突く。

事実、主人公は幼児であろう。ご存知膝下から急にくびれて動きやすいズボンである。彼は悠

然と餌をついばむ鳩の群に割り込む。そこのけそこのけ。ほこりを舞い上げて一斉に飛び立つ鳩。

装いも歩みも軽し春の雨　　智　昭

「春雨じゃぁ、濡れて行こう」ご存知月形半平太。その前に「月様、雨が・・」とある。春の雨はおやみなくいつまでも降り続くやうに(黒草紙)と芭蕉。本意にあくまでも忠実な作者の作句姿勢に打たれるのである。

ご破算に願ひましてと春一番　　清　龍

成るほどと一読後納得。気象学的には「春一番」が吹くのはせいぜい半日程度の僅かな時間であるが、これがわれわれの心に良い置き土産をもたらす。「さあ、冬も終りだ。新しくやり直すぞ！」と捲土重来を期す。たしかにそのような効果が春一番にはあるようだ。

春一番上野の山に仙女来る　　西　風

前掲の句とも関連。春一番は人間の暮しにさまざまなものをもたらすのだが、ある種の転機となることも。ここでは「仙女」をもたらした。当番の注記のとおり「パンダ」なのだが、異例の言葉を用いて読者の耳目を集めることも心憎いテクニックの一であり、春にふさわしい話柄であろう。

去年よりも女房困らす杉の花　　信　貴

杉の木は老木のある割には新しい木であるという。何を言っているかというと、その「化石」が全く見つからないのだそうだ。さて、その杉の花が今年も奥様を困らせるというのが氏の悩みなのである。もちろん、花粉症であろうが、それを一句になす氏のやさしさが眼目。「も」は不要。

娘の折りし四十路間近き内裏雛　　和　代

適齢期に達したお嬢さんの折っている紙雛なのであろう。しかも天皇、皇后一対の内裏雛なのである。それをはたでみている作者、やや想いは複雑。

内裏雛が四十路近い解釈もできて面白い一句となった。

人

黄水仙唯一在る框かな　　豊　嗣

黄水仙は南欧の原産で季節は春。何故かそれが上がり框に置かれている不思議

梅一輪一輪一輪開けば五輪六輪　　靖

「梅一輪一輪ほどの暖かさ」(嵐雪)。たしかに一輪開花すれば次々と。

雪吊りや鏡の池に科つくり　　黄　雀

後楽園であろうか。その媚態がよほど作者の心に残っているのか。

剪定の月桂樹かほる今日の庭　　業　平

今日月桂樹の剪定をした。楠科であるから、その切り口からか芳香が絶えないのである。

春めきてゆるキャラ満開日本中　　晶　子

ゆるキャラにしろB級グルメにしろ街興しで日本中を席巻中。元気な春が来る。

梅観より戻りて我家の庭の梅　　しろう

おかしなもので我々日本人は自宅に咲いていても観梅へ。やはりお前が一番と戻って安心。

(講師自句自解)

春の雪赤ちょうちんに触れて消ゆ　　**倦　鳥**

さすがに屋台で一人飲むことも少なくなったが、春の雪見酒は独りがよい。屋台であれば油臭い赤ちょうちんと肩をならべる仕儀となる。

限りなく落ちてくる大粒のぼたん雪がちょうちんにふれると、一瞬で消えてしまう。天空から長いことかかって落ちてきたのも、こうして消えるためだったのか。

地にとどかずに消える雪の運命は、人間にも似ている。

鳥兜の森　兼題　「酔い」　出題・選・評　河童

天

酔な街置屋と行灯三味の花　　**冬　草**

今時置屋とは実に「粋な」感じがしてほのぼのとしてきました。もう一度こんな時代が来てほしいもの。と思うのは私一人ではあるまい。

焼け酒の酔少し知る春の宵　　**ま　さ**

焼け酒やってもやはり春、少ししか酔いも回ってこない。でも、この年になってなぜ「焼け酒なのか。作者に聞いてみたいもの。

香に酔ひて一差所望す梅見の宴　　**和　代**

酒もいいが梅の香りに酔って、その勢いでもう一差いきまひょか。囲碁か将棋でも指しているのでしょうか。いいですね。以下高点句。

一言を酔ひの魔力をかりていふ　　**晶　子**

梅園で酔ふて邯鄲の夢を見る　　**河　童**

啓蟄と気づかぬ虫の二日酔ひ　　**倦　鳥**

（百花逍遥の高点句）

寒昴銀の矢を射るごとし　　**しろう**

寒の星座でひときわ眼を惹くプレアデス星団、和名スバル。「星はすばる」と枕草子。

点滴のポタリポタリと二月尽　　**弓　人**

無念の入院。点滴の雫を数えつつ癒える日を待つ。まさにめでたくその甲斐あった。

春の宵人情求め屋台かな　　**信　貴**

屋台の楽しさは見知らぬ他人ともすぐ親しくなれること。「エッ、秋田すか？」

春の雪遺影はいつも首かしげ　　**倦　鳥**

先刻亡くした犬のこと。

（あとがき：倦鳥）

当番幹事制にしてから初のこころみとして「ウェッブ句会」といたしました。世情をかんがみてのことではありましたが、当番河童氏のご尽力で、当会としては前代未聞の「語彙解説付」清記が完成、皆さんにはさぞかし骨の髄までご理解頂いた上での選句となったことでしょう。おかげさまで大変収穫の多い句会となりましたこと、御礼申し上げます。